

戸を叩いてしばらくすると妙齢の女性が戸を開けた

あら…

こんな夜遅くに  
どうしたのかしら？

まさか女性が出るとは思わず驚いたが  
取り合えず事情を  
説明することにした



ん？雨宿り？  
それくらい良いわよ

それにしても貴方  
ずぶ濡れね…

ほらっ風邪を引く  
前に入りなさい



こんなに身体  
冷たくなって

寒かったでしょ

彼女の柔らかい身体に  
突然抱きつかれた僕は  
平常心を保つのに必死で

ムキユ

せっかくだから家の  
お風呂に入っていきなさい

彼女の言われるがまま  
お風呂を頂く事にした



さつき抱きつかれたのは驚いたが  
無事雨宿りさせてもらいお風呂  
までいたただけて本当に助かった

それにしてもこんな所に  
家なんてあったらどうかと  
疑問に思ったが僕は

さつきの女性の感触や温もり  
甘い匂いの記憶で頭が一杯だった

湯加減どうかしら

ちよつと私も  
お邪魔するわね

その一言で僕は我に返り  
返事をする前に

浴場のドアが開いた

ガキ

ごめんなさいね

さっき私も  
身体濡れちゃって

折角だから一緒に  
入りましょう

大きい乳輪に  
重さで少し垂れた乳房

肉つきのいい腰

濃い目の陰毛

僕は彼女のタオルで隠し切れない  
豊満な肉体に目を奪われ完全に  
固まってしまった

ムギョ

タプ

毛水

もう…♥  
ジロジロ見すぎよ

流石に恥ずかしいわ

そう言いつつ彼女は  
恥じらいながらも  
大事な所を隠そうとするが

おばさんの裸なんて  
見ても嬉しくないでしょう

小さなタオルでは隠しきれず  
むしろより扇情に見えて  
僕はとっさに背を向けた

カー

ギョ

ムム

ブルン

ビーン



あら？  
からかい過ぎたかしら  
ごめんなさいね

僕が拗ねたと勘違いしたのか  
また彼女が抱きついてくる

そうだ！

折角だからおばさんが  
背中流してあげる

んん

んんんん

背中に彼女のやわらかい  
乳房が押し付けられて  
つい身体が反応してしまった

ペタ



あっ♡

これ…

足で隠していたのが  
勢いよく跳ね勃起したものを  
彼女に見られてしまい

僕は羞恥のあまり  
また動けなくなった

短い眩きのあとに  
心なしか肩に置かれた手に  
力がこもり背中に感じる  
彼女の鼓動が早く感じた

んんん  
んんん

ん



もう♡

おばさんの裸見て興奮しちゃったのかしら

そんな恥ずかしがらないでいいのよ  
おばさんに任せなさい

鎮めて…あげる♡

そう言いながら彼女は嬉しそうに更に熱くなった身体を押し付けて

彼女は僕の亀頭を揉みながら優しく囁いた



こんなに大きくして  
辛いでしよう

僕が立ち上がると  
彼女は股を大きく開き  
僕の前にしゃがみ込んだ

おばさんが…今  
楽にしてあげるわ

彼女も興奮してるのか  
鼻息を荒くしながら

僕の勃起した物に  
顔を寄せた

はー、

はー、

んキ

んキ

毛ヅ  
毛ヅ

はあ…♡

彼女も我慢の  
限界だったのか  
股間を弄り出した

今日一杯汗かいたのね  
少ししよっぱいわ♡

そんな反応見たらおばさんも  
たまらなくなっちゃう♡

自分を慰める彼女の姿を見た  
僕はますます興奮してしまう

それを感じた彼女の  
自慰もよりいっそう  
激しさを増した

恥ずかしくっても  
ここはカチカチのままね

ふふっ♡

ほ。

ほ。

しゅ。

ほ。

くちゅ♡

くちゅ♡



そして彼女は僕のを  
啜えだし指の動きも  
より一層激しくなる



浴場がチ○ポを啜る音と  
クチュクチュとマ○コを弄る  
音で満たされる

僕のを味わうように  
啜る彼女の顔は

最初に話した時の優しい  
おばさんとは思えない  
発情した雌の顔をしていた



その顔を見た僕は溜まらず彼女の口に勢いよく出してしまった

彼女も最初は驚いたがそのまま離すことなく僕の精を口で受け止め続けた



彼女も少しイッたのだろうが僕の足に少し水しぶきが掛かる



射精し終わると彼女は  
まだ残ってる精液を  
頬を窄めながら吸い始めた

鼻息荒くチ○ポを啜る彼女の目は  
よほど溜まっていたのか蕩けていた



はあ…♡

流石若いだけに  
濃いわあ

貴方の精液喉に  
絡み付いちやう

これで君のも  
治まったかしら

そう言いながらも  
彼女の視線はさっきまで  
釘付けだった

はー

はー

はー

ビュッ

ググッ

ビュッ

ぬめ

ゴロ





まだ勃起状態のチ○ポを見て  
彼女は舌なめずりしながら  
誘うように僕に目配せをした

僕はその欲情した  
目線に見つめられて

流されるままに  
彼女に身を任せた

大丈夫？  
重くないかしら

初めてが  
こんなおばさんで  
ごめんなさいね

その分一杯気持ち  
よくしてあげる♥

彼女は僕の上に跨り  
互いの大事な所を  
擦り合わせる

彼女のマン汁塗れの大陰唇  
に扱かれ、その気持ちよさに  
思わず僕も腰を振った



偶然互いに腰を振ったせいで  
思わず挿入してしまう

彼女の身体も準備万端  
だったのかあっさりと  
奥まで挿入された

んおっ♡

ほおっ♡

いきっ…なりい♡  
おくう♡

彼女は突然の挿入に  
獣のような声を出しながら  
身体を痙攣させた

キゅっ♡  
キゅっ♡  
ぢゅぽっ  
おしゅっ♡



もっ…もっ♡

いきなり突っ込むなんて  
いけない…子ねっ

おばさん…びっくり  
しちゃった♡

どうかしら初めての  
女の感触は♡

まだ出しちゃ駄目よ♡

そう嗜めながらも彼女の身体は  
久々の快楽に悦びを隠しきれないのか  
僕の物をきつく締め付ける

さっきまで自慰をしていた  
彼女の膣内は熱く火照って  
火傷しそうな熱さだった

はーっ

はーっ

んんんん

んんん

んん

んんん

ああ♡

久々のち○ぽお  
…おっきい♡

奥まで当っちゃう♡

はあっ♡

おおっ♡

君のよ良過ぎておばさんの  
腰勝手に動いちゃう♡

彼女はまるで味わうように  
僕の上でゆっっくり腰を  
動かしていた

カクカク

ブルン

又知

ブルン

下着

ちゅ

ちゅ

外見は平静を装っていたが  
彼女の膣内は強く僕のを  
締め付け痙攣していた

いけないわ、ゆっくり  
しようとしても勝手に  
腰動いちゃう♡

はあ♡いいわあ♡  
カリが私の気持ちいい所を  
引っ搔くのイッちゃいそう♡

あん♡

分かるかしら…君が  
今つついてるそこ  
私の…子宮口♡

あっ跳ねた…ふふっ♡  
興奮しちやった？

彼女も我慢の限界  
だったのか一心不乱に  
腰を降り始める

その激しい動きで  
風呂場にパンパンと  
肉がぶつかる音が響く

夢中で腰を振る  
彼女の姿はまるで  
発情した犬のようだった

クワ

パンパン  
クワ  
パンパン  
パンパン  
パンパン  
パンパン

淫らに腰を振る彼女を  
見た僕は我慢できず  
腰を突き上げる

ああ♥小突いちやだめえ  
それだめえ…いくつ♥

イッちやう♥

ごめんなさいっ  
…おばさんっ♥

気持ちよくてえ潮吹いて  
イッちやってるのぉ♥♥

それが引き金になったのか  
彼女は身体を硬直させ  
潮を噴出しながら絶頂した





「めんっ…なさいね

おばさん久々で  
すぐ…イツちやた♡

もう♡恥ずかしいわ

まだ…続き…  
できるかしら？

まだ絶頂の余韻が残っているのか  
息を切らしながら彼女は謝罪していた

先に絶頂した恥ずかしさで  
顔を赤くしながら彼女は  
申し訳なさそうにしていた

そして彼女の続きの催促を  
断る理由は僕には無かった

はっ♡

んっ♡

はっ♡

ブルっ♡

ブルっ♡

ブルっ♡

ブルっ♡

んっ♡



んんっ♡

こんな体勢で  
ごめん…なさいねっ

おばさんイッたばかりで  
足振るえちやっ…てっ♡

はあっ♡

そこっ…いいっ♡

僕達は体勢を変え再び繋がる  
そしてまた風呂場に肉がぶつか  
り合うイヤラシイ音が鳴り響く

さっきと違う所は  
僕が彼女を犯している  
音だということだ

彼女は四つん這いになりながらも腰を押し付け僕を挑発する

僕も射精に向けて彼女の肉厚な臀部をつかんで腰をより激しく打ち付ける

あんっ♡

上手よ♡  
遠慮しないで

おばさんのお尻犬の交尾みたいに一杯突いてっ

んっ

はっ

かっ

がっ

んっ  
んっ  
んっ

いっぱいびゅーびゅー  
していいのよ♡



僕がイキそうなのを察した  
彼女も腰を更に激しく押し付ける

はああ♥  
激しいっ♥

お〇んちん膣内でっ…  
ドクドクしてるの分かるわ

出そうなの？さっき出せ  
なかった貴方の…精液♥

注いでえ♥

そのまま…おばさんの  
子宮に直接っ生で…ね♥

蕩けた顔で中出しを  
ねだる彼女の顔を見て  
僕は我慢の限界だった



僕は彼女の腰を引き寄せ  
チ○ポを子宮口に押し付け  
思いつ切り射精した

初めての子作りセックス  
のあまりの気持ちよさに  
腰が抜けそうだった

彼女も絶頂しているのか  
膣内をきつく締め付け  
ながら痙攣していた



んんっ…ふぐう  
射精てる♡  
すっっ♡  
勢いい♡  
イグウ♡  
イッちゃってる♡



僕は残った精液を全部  
出そうと彼女の膣内に  
強めに腰を打ち付け

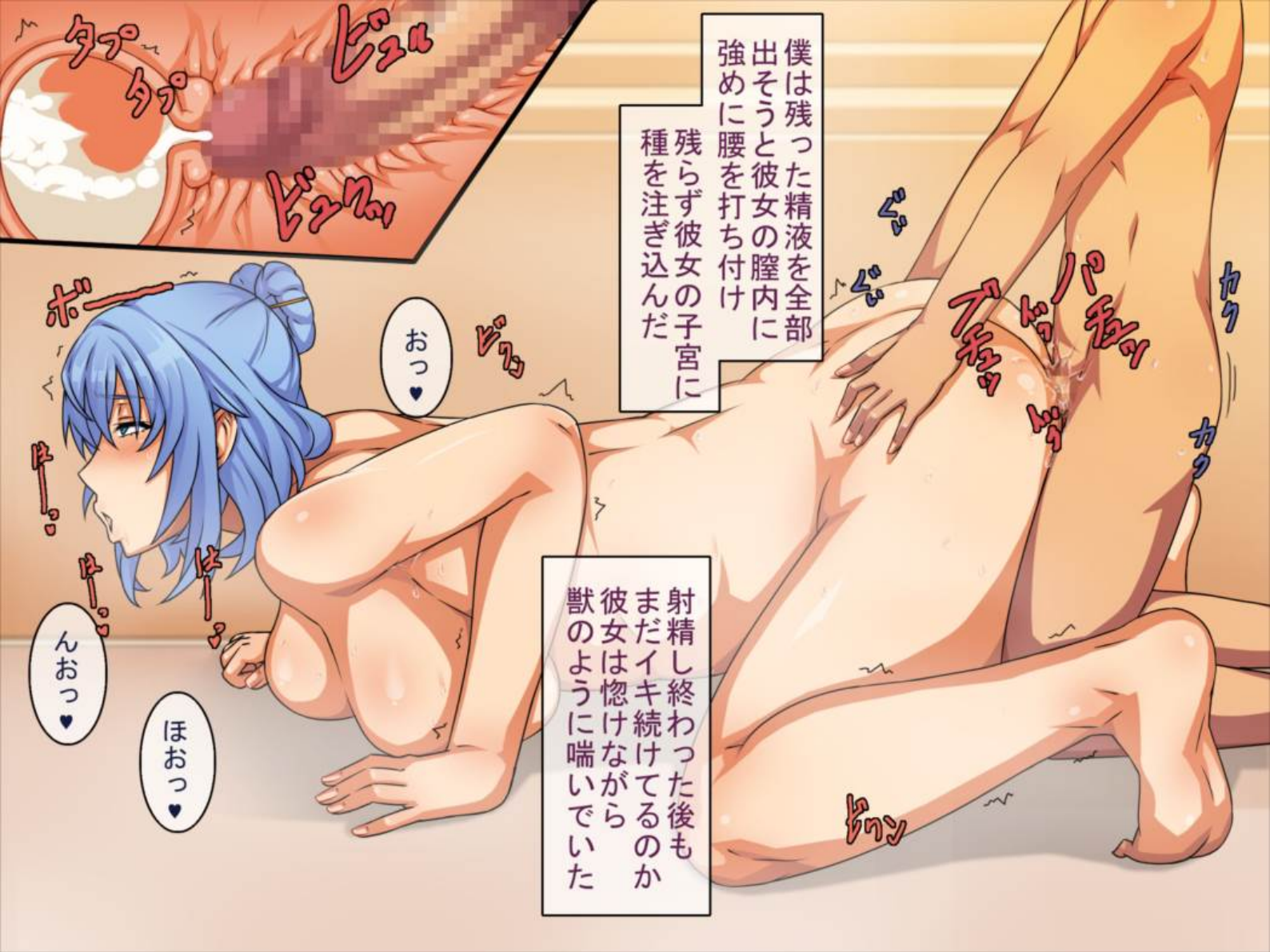
残らず彼女の子宮に  
種を注ぎ込んだ

射精し終わった後も  
まだイキ続けているのか  
彼女は惚けながら  
獣のように喘いでいた

おっ♡

ほおっ♡

んおっ♡



それから5分ぐらいだろるか  
すべて出し終えた僕は余韻に  
浸りながら彼女の膣内を  
こねくり回していた

膣内を刺激するたびに  
締まるのが気持ちよくて  
つい夢中で突いてしまった

んおっ♡

ほおっ♡

んんっ♡

彼女も気持ちよかったのか  
ピストンに喘ぎながら僕の  
好きなようにさせていた



一頻り楽しんだ僕は今も尚  
締め付けて離さない彼女の  
膣内からチ○ポを引き抜いた

すると彼女のマ○コから  
僕の出した精液が勢いよく  
噴出しこんなに出したのかと  
自分でも驚いた

すごっ♡

またっイッく♡

んああっ♡  
イグッう♡

抜いた時の刺激でまた  
イッたのだろうか彼女は  
精液を噴出しながら下半身を  
痙攣させ淫らに喘いでいた

あんなに優しいおばさんを  
僕がこんな淫らな格好に  
したのかと思うとまるで  
夢でも見てる気分だった



しばらくして落ち着いたら  
僕らは汗を流して一緒に  
湯船に入った

初めてのセックス  
どうだったかしら？

こんなならしない身体の  
おばさん相手で満足  
できたかしら

はーっ

チッ

チッ

貴方の貪る様な  
腰使い素敵だったわよ

おばさん一杯  
感じちゃった♡



謝罪した後突然彼女は身体を  
震わせ色っぽい声を出す

んんっ♡

「めんなさい

あっ♡

すると彼女のマ○コから  
また精液がこぼれ出てきた



また貴方の中から  
出てきちゃった♡

貴方のでかいので一杯  
突かれておばさんの

お〇んこ緩く  
なっちゃったかも

ほぁ♡

んっ♡  
び

チヤッ

どろろ

ブジュ



精液をマ○コから垂れ流す  
彼女の姿を見てまた僕は  
性懲りも無く勃起してしまう

あらっ♡

ひんひん  
びん

チャッ

んんん

んん

勿論この位置で隠せるはずも無く  
彼女の目の前に晒され続ける



ふふっ♡

マ○コから精液垂らすの  
見てたっちゃうなんて

変態さんね♡

はー♡

若いのねまだ  
出し足りないの？

はー♡

いいわよお婆さんの  
緩くなったお○んこ

貴方ので閉じて頂戴

お願い♡

チャッ

キュン♡

キュン♡

チャッ



次第にペースを早くすると  
彼女は足を巻きつかせ  
気持ちよさそうに喘ぐ

その姿に加虐心が  
芽生えた僕はまた  
彼女の膣内を乱暴に  
穿り回してしまふ

ああっ♡♡

だめ…よっ  
そんなにお〇んこ  
パコパコしちゃっ

はああっ♡

また絶頂が近いのだから  
彼女は足を強く締め付け  
腰をカクカク振り

自分からも  
絶頂を促していた

おばさんっ  
イツちやう♡  
また1人で  
絶頂しちゃう♡



そしてまた絶頂したのだから  
膣内と身体を痙攣させ甘える  
ように足を強く絡めてきた

彼女のイキ顔を見て  
僕は更に腰を振り  
射精の準備をする

んんっ♡

はあっ♡

んんっ♡

はあ♡

激しい♡

彼女も絶頂しながらも  
僕に抱きついて続け





彼女は何もいわなかったが  
少し僕を責める様に  
激しく腰を振りながら

僕の口内を舐め回した

僕の射精が近いのを  
感じたのか彼女は優しく  
頭をなでながらも

激しく貪る様なキスを  
しながら腰の動きを  
止めず僕の射精を促した



あああっ♡

射精してっ…  
貴方のザーメン

また膈内につ

おばさんまたっ  
イキそうだから

また私の子宮に  
直接注いでえ

貴方の種付け射精で  
一緒にイカせて♡

僕も彼女の膈内に出そうと  
彼女を浴槽に押し倒し  
小刻みに腰を押しつけた

彼女も僕を離すまいと  
恋人のようにガツシリ  
抱きつき夢中で腰を振り続け

甘えた声で僕に  
一緒にの絶頂を強請った





暫く僕達は繋がったまま  
絶頂の余韻に浸っていた

彼女の身体は柔らかく  
何時までも抱きついて  
いられる気がしたが

そろそろ…  
上がりましょうか

このままだと  
のぼせちゃうわ

ねっ♡

そう言う彼女の提案で少し  
名残惜しく思いながら  
風呂から上がることにした



ふう…

つい夢中に  
なっちゃったわね

浴室から出ると彼女は  
全裸のまま僕の  
身体を拭いてくれた

僕はまだ彼女の感触を  
忘れられずまたムラムラ  
して彼女を直視できず俯く

そういえば

外の雨そろそろ  
止んだかしらね

んっ…？  
どうかしたかしら

そういえばここに  
来てからどれ程  
経ったのだろうか

僕は彼女との情事で  
すっかり時間のこと  
を忘れて…

モッ

あらっ

貴方のまた漏れて  
きちゃったわ

んんっ♡

もう♡

ほんとに一杯  
出してくれたのね♡

彼女は腰を震わせた後  
膣口から精液が  
垂れてるのを気付き

少し恥ずかしげにしながら  
嬉しそうに子宮の辺りを撫でる

裸で精液を垂らしながら  
微笑む彼女の姿を見て僕は  
思わずまた抱きついてしまう

ナデ

トロ

ブルッ

ツィ

突然の事に驚いた  
彼女の静止も聞かずに

僕は抱きついた勢いで  
そのまま挿入した

挿入した時に入っていた  
精液が押し出され卑猥な  
音が結合部から出た

あんっ♡

またっ♡

お風呂っ出た  
ばかりなのよ

んんっ♡

彼女の膣内はまだ精液が  
残ってるせいかわ僕の物が  
すんなり奥まで入った

ガク

ゴッ

ギョ

ブツ

ブツ

ビク



もう駄目…っよ  
乱暴に腰振っちゃ

あっ♡

激しいっ♡

そんなにしたら

子宮に精液塗りこまれて  
おばさん妊娠しちゃうわ♡

彼女は嗜めようとしつつも  
僕を挑発するようなことを囁き  
僕に身を任せていた

そんな余裕のある彼女を  
乱れさせたくて僕は

さつき彼女に教えて  
もらった所を重点的に  
攻める事にした



おほっ♡

そこっ♡

そんなに  
ぐりぐりしちや

だめっ♡

教えてもらった所を小突くと  
彼女は顎を上げ喘ぎだす

その姿に気を良くした  
僕はさらに彼女を攻め立てる







はあっ熱い…  
またっでてるっ♡

んくっ♡

ほっ♡

ほっ♡

ほっ♡

あああっ♡

だめえ♡

僕は彼女の腰をガツシリ掴み  
また膣内の奥に注ぎ込む

レイプみたいに無理やり  
中出しされながら

おばさんまた  
イツちやってる♡

それに合わせ彼女も  
今日もう何度目かの絶頂に  
達し足を振るわせる

ガッ

ドム

ドム

ドム

ぐい

ぐい

ガッ

ガッ

ドクッ

ドクッ

僕はまた絶頂する彼女の  
膣内に精液を注ぎ続ける

おほっ♡

んおっ…ほおあ♡

熱いの…一杯…っ  
注がれてるわ♡

はあっ♡

また漏れちゃう♡

もう何度も中出しをしたせいか  
彼女の子宮に入り切らなかった  
精液が溢れて床を汚していた

僕はこの異常な性欲や  
射精量を不思議に思いつつも

彼女の淫らな肉体と射精の快楽に  
夢中でどうでも良くなっていた



全部出し切った僕は彼女の  
膣内からチ○コを抜く

あんっ♡  
だめえ♡

おばさんまた  
腰に力が：

んんっ♡

貴方のでかくて  
おばさんのお股緩々に  
なっちゃったかも

貴方の出した種  
全部流れ出ちゃう♡

連続の絶頂や性交せいで  
彼女のマ○コが緩くなったのか  
出した精液が卑猥な音を  
立てながらこぼれる

それを彼女は絶頂の  
余韻で呆然としながら  
残念そうに見つめていた



あら？

またそんなにいきり  
立たせてどうしたの？

おばさんの恥ずかしい姿  
見て興奮したんだ

ふふっ♥悪い子ね♥

いいわよ…  
こっちに来なさい

おばさんの身体  
もつかしら♥

また僕は彼女の痴態を  
みて興奮してしまい彼女に  
勃起したのを見せ付ける

そして彼女の言われた通り  
寝室え裸のまま向かった

一緒に歩く彼女から  
また甘い香りがする

今日はもう  
帰られなさそうだ





素敵よ貴方の腰使い

こんなになちっこく  
されたら貴方の子供  
欲しくなっちゃう♡

ふお♡…れろっ♡  
んんっ…かわいい♡  
ふふっ♡キスしたら  
貴方のヒクヒクするのね

そんな反応されたら  
おばさん益々本気に  
なっちゃう♡

もう数時間？数日？  
時間の感覚も曖昧なまま

僕は彼女との子作り  
セックスに溺れていった



ドキ  
ムキ  
パチュ  
ブチュ  
パン  
アキ  
パシ

ぐい

ギン

オデ  
オデ

フーッ♡  
んっ♡  
んっ♡  
んっ♡

数時間後



んあっ

おっ

あぁ〜



気が付くと僕は途中で寝てしまっていたのか

繋がったまま目が覚め朝日が出ている事に気付く

はあ♡

んあっ♡

ほー♡

ほー♡

はあ♡

ピクッ♡  
ほー♡

彼女は起きていたのか  
身体を動かすと  
微かに喘いでいた





あらっ…  
起きたのね  
おはよう♡

もうっ♡  
貴方寝ながら腰  
振ってたわよ

はー！

しかも離して  
くれないから  
おばさんも流石に  
イキ疲れちゃったわ

彼女はずっと  
受け止めていたのか  
疲れた声で僕を嗜める

それでも彼女は今の  
体勢を保ったまま  
僕をどけようとは  
しなかった

月しっ♡  
びん

ビク  
ビク

もうどれぐらい  
経ったのかしらね

雨も止んだみたい

はーっ

んんっ♡

はーっ

ビクン

そう彼女は窓から漏れ出る  
朝日か夕日か分からない  
日差しを見ながら言う

ぐん

ドク

ビクン

そして僕はずっと  
彼女と繋がっている  
事を思い出し

いい加減チ○ポを  
彼女から抜く事にした

力の加減が分からず  
思いつ切り抜くと  
彼女は驚きと快感に  
身体を跳ねらせた

ちよっ  
いきっ…なりい  
ぬいちゃっ♡

んおっ♡

ほおっ♡

そして彼女のマ○コは  
まるでチ○ポで精液を  
せき止めていたかのように

次から次えと精液が  
あふれ出し布団を汚し  
部屋の中が更に  
生臭くなった





チ○コを抜いた衝撃で  
彼女は暫く僕の出した精液を

マ○コから噴出し  
ながら絶頂していた

おっ

ほおっ

んおおっ

貴方の精液  
止まんないっ

ガッ

ガッ

ドビュ

ドビュ

ドビュ

ドビュ  
ドビュ  
ドビュ

ガッ

ガッ

暫くして落ち着いたのでから  
彼女は行きお切らしながら

自分の出した精液を見た

こんなに一杯  
出してくれたのね

すごい臭いと量  
まるで馬並だわ

こんなに濃いので…  
ちよつと危ないかも

ふふっ  
…冗談よ

それにしてもお布団も  
身体も汗や色んな  
体液でべとべとね

また彼女は調子が  
戻ってきたのか  
僕をからかいたす

あ  
どろどろ  
あ



こんなに汚れちゃって

帰る前にまた...

お風呂...入らなきゃ

ねっ♡

そして彼女は僕の返事を聞いて微笑む  
そして13ページに戻る